

# 野中悠樹 やねくボクシング

RJ関西通信員 山崎方義

## 野中悠樹 復活へのロードマップ

元OPBF・日本スーパーウェルター級チャンピオンの野中悠樹(尼崎)が9月12日に再起戦を行う。昨年の11月1日、柴田明雄に判定で敗れ、2つのベルトを同時に失って以来、およそ10か月ぶりのリング復帰である。対戦者は再起戦というにはあまりに強敵で、調整試合的な要素は見出せない。WBO世界スーパーウェルター級7位でヨーロッパ・チャンピオンのドミトリー・ニクーリン(ウクライナ)。21戦21勝(8KO)のサウスポーだ。当初はWBA世界ウェルター級9位のビクトル・プロトニコフ(ウクライナ)との対戦が予定されていたが、相手が腕を骨折したことにより変更された。より強い選手に変わったともいえよう。



今回は、世界ランカーとの再起戦を迎える野中悠樹に話を聞いた。なお、私が尼崎ジムに野中を訪ねたのは7月半ばのこと、当時はまだ対戦者が変更になる前の時期だったことを予めご承知願いたい。

## タイトルマッチの軌跡

野中への取材は5年ぶり2度目である。前はまだランクに入っていなかった頃で松元慎介(進光)との対戦を前にした時期だった。それ以来、着実に成長を遂げた彼は日本とOPBFの2冠を制する。その軌跡をざっと振り返ってみよう。

2008年9月22日、石田順裕が返上して空位となった日本スーパーウェルター級王座を古川明裕と争い、8R TKOで王座を獲得した。同年12月27日に地元・尼崎に同級1位



シャドーで体をほぐす

の音田隆夫を迎え、判定で初防衛に成功。2009年3月22日、やはり1位の新井恵一を7回TKOに下し、2度目の防衛を果たした。

6月20日に後楽園ホールで飛天かずひこの持つOPBFスーパーウェルター級王座に挑戦し、8R負傷判定勝ちでOPBFのベルトも同時保持することになった。ちなみにこの試合は再戦で、野中にとっては雪辱戦でもあった。11月1日、日本・OPBFのダブルタイトルをかけて柴田明雄と対戦したが、判定負けで2つのタイトルを同時に損失した。

柴田戦について野中は「調子が悪かったわけではないが、相手のベースに巻き込まれてしまった」と語っている。

## 高いモチベーションをもって

再起戦は二転三転してなかなか決まらなかっただといふ。

「いつ試合が決まってもいいように自分をコントロールしてきました。ブランクはあるものの、スパーをしていたので勘は鈍っています」

8月にはロサンゼルス修行に出てスパーを積み重ねることだ。試合間隔があいたことへの不安はない。高いレベルの対戦者を迎えることについてはどうだろう。

「自分の中では、今が一番のつています。消化試合をやってダメージを蓄積するより、一発勝負をかけることを希望しました」

この試合にかける野中のモチベーションは高い。前の対戦者についてはビデオでスタイルを研究し、下にパンチを散らしながら当てていきたいと語っていた。相手が変更になったことで少なからぬ影響はあるが、同じウクライナの選手であり、基本重視の型崩れしない、旧ソ連系のボクシングは同じかもしない。

## もっと獰猛になること

日本、さらにOPBFのチャンピオンになり、1位挑戦者を迎えて連続防衛するなど、野中のボクシングはある時から“抜ける”ようになつたと思う。何かブレークスルーとなつたのだろう。

「距離感がつかめるようになったことが大きいです。それで試合のリズムがつくれるようになりました」

今回の試合に向けては、筋トレでパワーをつけた後、試合まで2ヶ月を切った今、走り込んでスタミナをつけています。

「ミット打ちもスタミナ強化を狙ったもので、もちろんスパーキングも消化しています」

その一方で、飯田覚士が実践したことでも有名なビジョントレーニングやメンタルトレーニングも積んでいる。

「試合に勝ったところ、勝つパターンを想像して結果に結びつけるんです」

これは大阪・天王寺のイプラスジムまで通っているというから、尼崎からはかなりの距離だ。

本人が分析する課題は次の通りである。

「もっと試合をコントロールすること。そしてもっと獰猛になること、そういった練習をしたいです」

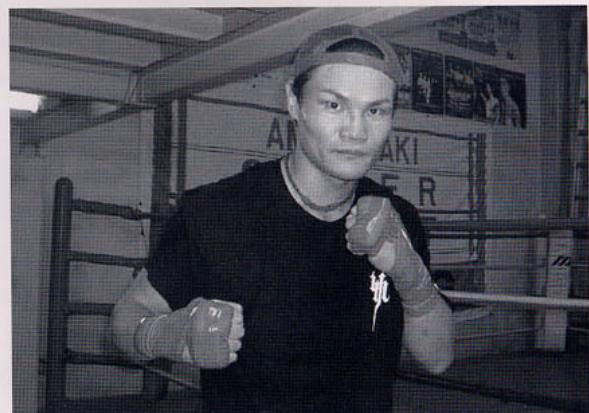
それは、行けるところ、行くべきところで見てしまわずに、攻めるボクシングをすることだ。

## 尊敬するボクサーは西岡利晃

小島会長は、自分の持ち味を活かすことがこの試合のポイントだと語る。

「変にあせらないことです。10ラインズのなかで、カウンターをとれるチャンスが必ず来ます。それが入ったら勝負にいかなければなりませんが、それまではへんに打ち合いとかに巻き込まれることです」

野中は、WBCスーパーバンタム級王者の西岡利晃の大ファンである。同じサウスポー



野中悠樹 19勝(7KO) 8敗2分

であり、尊敬できるボクサーだという。元WBAスーパーバンタム級王者の佐藤修さんが共通の知人であることから、6月にその西岡と会う機会があり、大きな刺激を受けた。

「良いポジションをとて全身の体重を乗せる左の打ち抜き方など、たくさんのこと学ばせてもらいました」



西岡利晃と(野中のブログより)

## 更なる高みへ

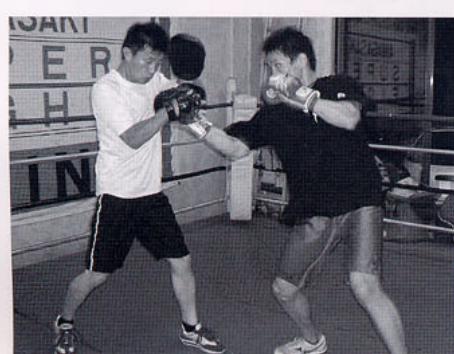
私は本誌の取材で選手に会うと「ボクシングはあなたにとって何モノなのか?」と問うことにしていて、野中に対しても例外ではない。

「今は人生の全部、そのものです」

タイトルを失った後も、引退は考えなかつた。日本とOPBFを極めた彼にとって、再び拳を握るモチベーションとなりえるのは、それ以上の成果を目指すことである。

「世界、意識しています」

この階級で世界王者になること、いや、挑戦すること自体が困難なのは彼もわかっている。だが、石田順裕という世界王者が日本に、いや大阪にいることもまた事実である。



桂トレーナーとのミット打ち

石田にはおよそ6年前に敗れているが、リベンジを兼ねて彼に挑戦できれば理想だろう。「次の試合は、これまでのタイトルマッチよりも重要な試合です。これまで負けても得るものがありましたが、次は負けたら終わりやと。この試合に全てをかけて、背水の陣で臨みます」復活へのロードマップ。それは野中にとって、新たな飛躍への行程表でもあるのだ。

# ★ボクシングの見方★

## 試合の勝敗 *victory or defeat*

試合の得点は次の4項目を基準として評価、採点される。

### 1.クリーンエフェクティブ・ヒット

正しいナックル・パートによる的確にして有効なる加撃。  
有効であるかないかは、主として相手に与えたダメージに基づいて判定される。

### 2.アグレッシブ

攻撃的であること。ただし加撃をともなわない単なる乱暴な突進は攻撃と認められない。

### 3.ディフェンス

巧みに相手の加撃を無効ならしめるような防衛。  
ただし攻撃と結びつかない単なる防衛のための防御は採点されない。

### 4.リング・ゼネラルシップ

試合態度が堂々としていてかつスポーツマンライクであり、  
技術、戦法的に相手に優れ、巧みな試合運びによって相手を自己のペースにもっていくこと。

## 試合ラウンド *round*

1ラウンドは3分間とし、各ラウンドの間に1分間の休憩をおく。

両ボクサー、レフェリー以外何びとも試合中にリング内に入ることは許されない。公式試合のラウンド数は、4回戦・6回戦・8回戦・10回戦・12回戦の5種類とする。日本タイトル・マッチは10回戦、東洋太平洋タイトル・マッチは12回戦とする。ノンタイトル・マッチは原則として10回戦を越えてはならない。

エキシビション・マッチ(公式記録に加えない)は原則として6回戦までとする。

## グローブ *glove*

試合に用いるグローブの重さをつぎのとおり定める。

スーパー・ライト級まで 8オンス (227.0グラム)

ウェルター級以上 10オンス (283.5グラム)

※エキシビション・マッチはこれより重くてよい。

※グローブの皮革の重さは、内部の詰物の重さより軽くなければならない。

## クラスとウェイト *class & weight*

1	ミニマム級	105ポンド以下	(47. 62キロ)
2	ライト・フライ級	105ポンド～108ポンド	(48. 97キロ)
3	フライ級	108ポンド～112ポンド	(50. 80キロ)
4	スーパー・フライ級	112ポンド～115ポンド	(52. 16キロ)
5	バンタム級	115ポンド～118ポンド	(53. 52キロ)
6	スーパー・バンタム級	118ポンド～122ポンド	(55. 34キロ)
7	フェザー級	122ポンド～126ポンド	(57. 15キロ)
8	スーパー・フェザー級	126ポンド～130ポンド	(58. 97キロ)
9	ライト級	130ポンド～135ポンド	(61. 23キロ)
10	スーパー・ライト級	135ポンド～140ポンド	(63. 50キロ)
11	ウェルター級	140ポンド～147ポンド	(66. 68キロ)
12	スーパー・ウェルター級	147ポンド～154ポンド	(69. 85キロ)
13	ミドル級	154ポンド～160ポンド	(72. 57キロ)
14	スーパー・ミドル級	160ポンド～168ポンド	(76. 20キロ)
15	ライト・ヘビー級	168ポンド～175ポンド	(79. 38キロ)
16	クラーザー級	175ポンド～200ポンド	(90. 72キロ)
17	ヘビー級	200ポンド以上	